ネパールと元留学生のソバナさん

15 期　舟田 節子

「息子が行ったきりのネパールって、どんな所なのかと思って…」

2007 年の 3 月末、石川ネパール協会で開催した企画展に訪れたお母様は、写真の裏まで覗きたそうに眺めておいでました…。さて、どれほどネパールの魅力をご説明できたでしょう？

ヒッピーやビートルズに限らず、インドやネパールは若者が填まる国…既存の価値観がひっくり返る国です。

もちろん私の場合は、世界最高峰のエヴェレストが聳える国としてインプットされ、続いて、世界の 8000m 越え 14 座中、8 座が聳え、それらをトレッキングで拝める国…の認識でした。
平成 30 年は、久しぶりにネパール色に染まった年でした。

そもそもは、e 教育サロンという、金沢大学先端科学・イノベーション推進機構内の一般社団法人の理事長を、元卒論指導教官が務めておいでで、その月刊機関誌の表紙と巻末を、季節の山と花の写真で飾るようになったのが、ことの始まりです。冬場は取材が難しくなってしまうので、見応えある手持ち写真の中から、「エヴェレスト街道などはいかが？」と提案したところ、3 回シリーズで、紹介することになりました。

12 年前のことになってしまいましたが、ポジフィルムを 39 本も使ってきた絶景の数々。山というからには、エヴェレスト！という絶対存在のお茶濁しなら、まあ許されるかも…。ネパールという国や、高所トレッキングも判るように、解説をつけました。

これが元で、この夏には、いわゆる「生きがいサロン」系の月例会で、「エヴェレスト街道を行く」という題での講演を…という流れになりました。

猛暑の時期に、氷雪の映像で涼んでもらおう…が趣旨の、気軽なものでした。少しでも多くの方に見て頂けたなら、散財が報われるというものです。結果は、大盛況ということになりました。

何といっても、世界レベルの絶景なのですから、満足していただいて当然！

でも自分としては、１時間の持ち時間内で、見せるべき映像と話題が、本当に適切に選べていたか？の疑問が残りました。ある種の基準には達していたい…。そうなっていただろうか？

それが、たまたま 2 日後に、ＢＳアーカイブで、天空紀行「エヴェレスト街道を行く」が流れることになったのです。これはシメタ！と、どこを切り取り、何を語っているか、隈なくチェック。

結果は 9 割がた合格。今時の、どんな器か判らない人の「いいね！」をもらったって仕方がないことです。その点、天下のＮＨＫが同じシーンを絞り込み、同じ話題を語っていてくれたなら、そのレベルの鑑識眼はあることになる…（自画自賛）。

あらためて、とびきりの景色を見てきた、とっておきの体験することができた！の幸せに浸ったものです。

ソバナさんが e 教育サロン勉強会の講師に
（10/12　金沢大学ナノ生命科学研究所にて）

さて、これまで、日本にはない標高と景色を求めて、キナバル登頂、キリマンジャロ登頂、タスマニア、カナディアンロッキーのアシニボイン、シャモニー～ツェルマットのオートルート、カムチャッカ、四姑娘山麓などを旅してきました。

しかし、やはりネパールは、特別です。あの敬虔な祈りを捧げる人達や、60 年前の日本に重なる山村風景があっての、ヒマラヤです。征服の歴史の、ヨーロッパアルプスとは違います。

さらには、金大へ留学生として来ていたソバナ・バジュラチャリアさんを知ったことで、ネ

パールは唯一無二の国になりました。
そのあたりを今回はまとめてみます。（加齢すると、昔話が多くなります。あれがこう繋がったから…と、俯瞰できるのは、過ぎてから判ることなのです。）

さて、そもそものスタートは2000年のことです。ミレニアム、そして銀婚式。何か思い切ったことをやりたい！
この伏線には、当時アルパインツアーサービス社の名古屋所長だった、29期ＯＢの深井君の存在があります。「何か思い切ったこと」とは、私の場合、すでに、ヒマラヤトレッキングを指していました。
でも、家族と、仕事（自宅でのフランチャイズ学習塾）を抱えた金沢の箱入りは、憧れても、決断のしようがありません。
ところが、一年前、兄嫁が白血病で亡くなり、母が兄宅の主婦に返り咲きました。子育てが終わるまで待った後に、必ずしも悠々自適の時間が保証されるわけではないのです。そこからの教訓は「待ってなんかいられない！」でした。
そんな時に、大学時代は共に山サークル系だったと判った、高校の同級生から、「クンブ協会」なるものを紹介されました。なんと、シェルパのふるさと、クンデ・クムジュン村に博物館を建てようという趣旨の会でした。そんな大それた話…でしたが、経済格差のお蔭で、ネパールでは150万円もあれば学校が建つのだそうです。そのプランの視察のために、協会主催のトレッキングを出す…という。
突然ぶら下がった「ルビーロマン」！国際支援という、この大義名分なら、家族も、塾の保護者も説得できます！（もちろん、言い訳の次元）
実はネパールのヒマラヤの麓の村からは、お隣富山県の建設会社に、村の若者８名が技術研修生として毎年訪れていたのです。日本語を習得した彼らは帰国後、村の成功者が経営する建設会社兼ガイド会社に勤めます。その成功者とは元教師で、インテリの彼は消えゆく伝承集めなどにも協力的…というのがご縁でした。（その建設会社は、後に、富山の会社の支社という形になりました。）
多くのシェルパ族が、日本の夏の山小屋に、出稼ぎに来ています。岩の殿堂の剣岳、そして立山近辺は、シェルパたちにはとても近い所…そのように、北陸は、かの地と繋がっていたのでした。

その後６回もネパールを訪ねることになったのですが、この初回（2000年2/23 ～3/5）は、やはり圧巻でした。政変前のネパール王国は、今のブータン以上に、幸せな国の評価がなされていました。カトマンズの往来は、人と牛が溢れていました。ロープでドアを結わえた中古車が、クラクションで人をかき分けながらのろのろ走っていて、人力車がメインでした。大肉塊や果物の並ぶ汚い露店、真夜中だというのに、「ヒャクエン、ヒャクエン」と言いながら群がってきた子供達…。
（その次の５年後には、それらはもう消えていました。中世文化のままのネパール王国の、ぎりぎり最後を見たのだという気がしています）
国内線でルクラに降り立ち、エヴェレスト街道に入りました。多くのチベット仏教の表象物や、額の紐で三角竹籠（ドッコ）を担ぎ、素足で歩く人々…何もかもが珍しくて、１ピッチ行かないうちに、フィルムを１本使ってしまうくらいでした。

チベット仏教では、旅の安全を祈ったり、歓迎したりの印として、カタという絹布を首に掛ける風習があります。これをめぼしい橋や表象物に巻いていくと、無事にそこへ戻れる…という言い伝えもあります。
ナムチェバザールから、思わぬ風雪の中を下山した際、バリバリに凍り付くカタの列に、自分のを結わえてきました。「もう一度、ここへ！」
ナムチェの丘からは、エヴェレストはヌプツェ～ローツェの壁に遮られ、わずかな頂上部しか見えません。それ以上を見たければ、この奥へまわりこまねばなりません。カラパタールでのパノラマ写真のポスターを、教室に貼り、さらに５年間眺めることになりました。「いつかきっと…」
なおこの時は、下山の飛行機がルクラから３日間飛ばず、チャーターヘリを頼んでカトマンズに戻り、ようやく帰国便に間に合うという目にも遭いました。

そんな興奮冷めやらぬ時に、ネパールからの女子留学生が金大へやってきたのです。
カトマンズの南に隣接する古都パタン生まれ

のソバナ・バジュラチャリアさんは、14歳の時、まず全国日本語弁論大会に出場して最優秀賞をとり、次に日本国際交流基金主催の日本語検定試験で全国優勝し、初来日をしたという人でした。その時のご縁で千葉県の大学に私費留学をし、さらなる磨きをと、ネパール人が一人もいない金大を選んで、「現代日本の地域社会における寺院の役割～金沢の事例」という論文にとりかかっていました。そのアルバイトの一つであったネパール語講座が彼女との出会いでした。

流暢に日本語を使えるソバナさんゆえ、文化の違いや些細なことの考え方の違いなどを自由に話し合えましたし、金沢の文化も楽しんでもらうことができました。写真の勉強に来日した弟のアムリット君とも、先端技術大に留学してきた二番目の弟アンモール君との交流もありました。

デン君の七五三祝い
（10/19　久保市乙剣宮にて）

さて、私の「いつかきっと」は、末息子が金大に入学した（2005年）ことにより、叶うことになりました。バイトと称して留守番＝塾稼業を押し付けたのです。教材セットなど、運営ノウハウを叩きこみました。

・4/23～5/6 シッキムヒマラヤ（カンチェンジュンガを見る）
・8/5～8/15 カラコルム（フンザ、メルヘンの草原　ディラン、ラカポシを見る。ＯＢ会で）
・ 10/27～11/23 エヴェレスト街道（ゴーキョ、カラパタール、チュクンピーク）

のように、海外トレッキングをしまくりました。

最後の28日間のトレッキングは、王宮乱射事件がおきて、ネパール方面へのトレッキングが出ない時期が続いたあげく、ようやく成立したものです。

ナムチェから奥は、高所順応が必要になり、一日につき500m以上標高を上げることができません。そのため展望地一か所でも、20日間かかることになります。であれば、エヴェレスト街道方面の三か所の展望地を一度で済ませた方が、三度に分けてのチャレンジより、効率がいいとなります。

この時の躊躇の背中押しをしてくれた深井君には今でも感謝です。私より若い読み手に、この稿で一番に伝えたいことでもあります。

トレッキングに申し込む程度の「無謀」なら、やるべきです。あれから、13年の間に、こんな28日間にでられるようなチャンスは一度もありませんでした。自分も周囲も、あれから、歳をとる一方でした。まだ一眼レフを首からぶら下げているだけの体力がありました。存分に、見るだけ見たと言えて、アングルを選べたのは、余裕があったお蔭です。どのシーンも、今でも鮮やかに思い出すことができます。

これまで重荷のように思ったこともある家族が、一番に夢を応援してくれたことも、一生の宝といえることでした。

この旅の最終日には、ソバナさんのパタンにある実家を訪ね、両親と、新婚ホヤホヤのアムリット夫婦の歓待を受けました。（ソバナさんは、この年の2月に同じカーストの青年と結婚し、川崎市に転居していました）

2007年8/8～8/18　ランタン谷　ＯＢ会
山が全く見えない雨期の、ネパールを体験。花を楽しめましたが、山ヒルに襲われ、一年近く、傷跡が潰瘍状態になり悩まされました。

この時も、ソバナさんの実家を訪ね、今度は留学準備中のアンモール君にパタンの町を案内してもらいました。

2009年 来日したアンモール君と交代するように、ソバナさんは帰国し、日本大使館に勤務することになりました。

2011年5月には、奨学金を出してくれていたロータリーの留学生のホームカミング制度を利用して来日。この時は私の勤務校での職員研修でも講師を務めてもらいました。まだ、東日本大震災の傷跡深い日本に、不便ゆえ感謝しながら過ごすネパールを語り、励ましていきました。

2013年3/24〜4/1　シャクナゲに染まるゴラパ二峠へ。狭いネパールなのに、西側は民族も宗教も全く違います。ダウラギリや世界一の渓谷、カリガンダキも見ました。この時は、岩崎元郎氏の「地球を遠足」のシリーズでした。妊娠中のソバナさんと待ち合わせ、国際交流祭り用の買い付けを手伝ってもらいました。

2015年12/28〜1/2　マナスル三山展望トレッキングへ。この年の4月25日、ネパールで大地震発生。直後にソバナさんの無事を電話で確かめたあと、この頃にようやく出始めた「震災応援トレッキング」に参加しました。ソバナさんと抱き合って再会を喜び、愛くるしいデン君にはステップアップミルクをプレゼントしてきました。
初日をエヴェレスト遊覧飛行で拝みましたが、年始風景が全くないことに、「お正月」だって日本文化のうちなのだと、再発見しました。

そして、2018年10月の今回は、ロータリーの、貯水タンク寄付のプロジェクトにからんでの来日となりました。ご主人と5歳になったデン君も同伴だったので、後半は我が家にホームステイをしてもらいました。ネワール語、英語、日本語がチャンポン状態のデン君には、幼稚園体験や、息子や孫息子達も着用した羽織袴のセットで七五三体験もしてもらいました。翌日は一転ネパールの正装で、ひがしの茶屋街へ。「金沢芸妓のほんものの芸にふれる旅」というイベントに参加し、ここでも「かわいい！」ともてまくりでした。

e 教育サロンの勉強会にも参加してもらいましたが、キャンパス内をドライブした時、「ママの勉強した大学だよ」と語りかけるソバナさんは、本当に幸せそうでした。

これからますます働き盛りになるであろうソバナさん、抵抗なく異文化を受け入れているデン君…新しい時代を生きていってくれるでしょう。

『金沢芸妓のほんものの芸にふれる旅』に参加
（10/20　ひがし茶屋にて）

金沢城公園と兼六園を周る
（10/21　金沢城公園にて）

ネパールの政治はまだまだ落ち着いたとはいえませんが、停電も断水も解消されつつあり、近代化が加速していくようです。

山をきっかけに異国の人と知り合い、日本や金沢を少し違う視線で見られるようになったのも、幸せなことと思います。